

「江戸の町」

東京都交友会

秋の大会

一般公開講座

平成 26 年 11 月 5 日

講師 寛永寺長 瀧 浦井正明先生

ご紹介頂きました浦井と申します。東京都の皆様は江戸の町の話をするというのは、考えてみればちよつとおかしかったのかなという気が致しますけれども、江戸というところはどいうところだったのかということをお話ししようかということ、今日伺いました。

家康の先見性

家康という方が江戸に入られた時というのは、江戸は全く未開に近い場所だったといふふうにいわれています。最近、ここ 10 年か 15 年ぐらいの歴史の方の研究家の間ではそうでもなかったということが言われるようになってきて、初めは本当に数百人ぐらいの人口の寒村だったんだと言われておりましたが、最近はずっと千人や二千人はいたん

じやないかという話になってきました。

ただいずれにしても、大都市を考えれば、どうしようもない寒村だったんだろと思えます。その寒村に家康が目をつけるわけですが、例えば今の日比谷という場所がありますが、あれは海苔ひびのひびで、あそこがまだ当時湿地帯だったということを表しております。

要するに東京湾がずっと入ってきていたということですね。そういう場所に家康は来たんだというふうを考えていただければいいんだろうと思います。

家康という人はですね、本来自分の居城として、中心の場所として選ぶ場所としては、頼朝に由来する鎌倉か、天正 18 年の小田原の北条攻め

の最中に秀吉から関八州というのを貰うわけですから、その関八州の中心地である小田原と、このいづれかを選ぶのが筋だろうと思いますが、家康は敢えて江戸という場所を選んだ。そのへんに家康という人の先見性があるのかなと私は思います。

家康が入ってきた頃の江戸というのは、江戸湾に向かって 5 つの台地があった。手を広げて頂くと、一番左の方から、これが品川・高輪の台地、その次に麻布と飯倉の台地というのが 2 つめ、3 つめが桜田・平川の台地、今の桜田門のあたりですね。四つめが神田と本郷の台地、それで向って一番右手にあるのが、上野王子の台地という、この五つの台地がずっとこう東京湾といいますが、江戸湾に向って突きだしていたという感じの土地だったわけです。

そこへ家康は目をつけて、その中の神田本郷の台地を削って、湿地帯を埋めていきます。その埋めた所にずっと水路を作ってくるんですね。これが家康の先見性のあると

ところで、水路を掘ってその土と、神田本郷の台地を削った土で江戸を埋めて作っていくという形になるわけです。

ですから、水路で江戸湾から、居城である江戸城まで繋げて入ってこられると、そういう場所をつくったということとです。明治 20 年くらいまでは、人は地上を歩いて、大事なものは皆、船でもって、水運でもって運ぶという時代でした。後にお話しますけれども、関西からの大事なものは、皆、船で江戸に来ていたわけですし、そういう点では家康というのは、水運というのがいかに大事かということを基本的にわかっていただんだと思います。

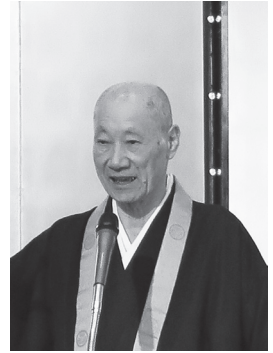
そういう意味ではですね、水路の価値というのは皆様御存知の通り川越という場所を考えてみますと、あそこは小江戸と呼ばれていました。川越が今、自動車で行っても電車で行っても結構かかりますけど、江戸時代はあそこに新河岸川という川が、今でもちよるちよるした川でございませけれども、流れていまし

て、それをずっと下つてくると、すぐ隅田川へ出られると。そういう水利があったんですね。

従って川越というのは、こだけ離れていても江戸に非常に近い、江戸の事が半日で川越に伝わる、川越のことが半日で江戸に伝わるというような場所でした。しかも背景には鎌倉街道を控えているような要衝ですから、あそこには配置した大名というのは、松平大和守とか、堀田とか、殆ど幕府の非常に大事な譜代の大名を川越に配置して、幕府はそこを固めるという形を

浦井正明 先生 略歴

昭和 12 年 東京都出身
慶應大学文学部卒業
寛永寺執事長を勤め、現在は長膺・東叡山現龍院住職
台東区教育委員会委員長、台東区文化財保護会委員等を歴任
著書に「もうひとつの徳川物語」「ほとけさまのサイン」など多数



とつています。それは一つは水利でもって江戸に繋がって来たからということだろうと思います。まさにその辺が家康という人の先見性のあったところだろうというふうに私は思っているわけでございます。

江戸の町数と町並み

そうして出来ていった江戸の町というのは、一体どれぐらいあったんだろうか。というふうに言われますと、すぐ皆様の頭には江戸八百八町という言葉が浮かんでくると思いますが、実際にはですね、八百八町どころではありません。江戸の後期にはあったということ。旧十五区の地域です。旧十五区の数から、それに千六百の数の町があるのかとお思いになるかもしれませんが、例えば今、新宿の方へ行きますと、笹筒

町とかああいう小さい町がありまして、私の台東区からすると、河内山宗春の住んでいた練堀町というような町が秋葉原の近くにありますが、非常に町の単位が小さいんですね。

ですから、今の町の単位でお考えになったら、ちよつと合わないと思いますが、昔は町の単位が非常に小さいですから、旧十五区の中に約千六百からの町があったというふうに言われています。そういう点ではですね、だいたい江戸というのは町の数は大変多い。八百八町というのはいわば美称だと考えて頂ければいいと思います。白髪三千丈の類です。

実は、江戸の町割りというのを今、私も確認しようという事になると、とんでもない所に残っているんですね。それは皆様がよくお出でになると思いますが、銀座八丁。あれは江戸の初期の町割り。あれは江戸の初期の町割りがそっくり残っているんですよ。道幅は広くなっています。しかし、縦割りの部分、一丁目から八丁目というふう

とかいろんな名前と呼ばれていた場所で、一丁目から八丁目とはいいませんけれども、あの銀座八丁の町割は、非常に綺麗に江戸時代の町割りの道幅を広げた程度の町割り

で、今でも繋がっているという事で、案外江戸というものは、現在にも伝わっているんだなという気がします。

先程、水利の話申し上げましたけれども、例えば江戸城とか寛永寺や増上寺に造られた徳川家の霊廟、そういうところに巨大な石が運ばれてきているわけですが、それも全部水利から運べるんですね。あれ、陸路できたらとてもそれは出来ない。初めの頃は真鶴あたりの石を使っています。しかも、山から切り出して海岸までもってきて、そこから陸路ではなくて、筏に組んで、筏の上に乗せたら

ひっくりかえつちやいますから、筏に紐でもって繋いで、水中で石を持ってくるんですね。浮力を使っているわけですが、それで筏で江戸まで

持つてくるという形で。大きなものはほとんど(生鮮食品みたいな物とか、腐っては困る物。そういう物は後程申し上げますけれども)船で来るといふ形。

ですから、稲取あたりに行きますと、私は船に乗せてもらって見てきましたけれども、今でも水中に巨大な石が落ちていりますよ。あれは結局、筏に組んでうまく出港させたつもりが、どこかで吊っていた縄が切れて、水中に石が落っこつちやった。今のような道具がありませんから、いっぺん落っこつちやつた石はどうにも拾いようがない。ということ、今でも海

の中には大きな石が残っているのは、見られますけれども、そんな具合に殆ど水利で動いているんだというふうにお考えになって頂いていいんだろ

うと思います。で、実は江戸という町をさつき旧十五区と申し上げましたけれども、それは江戸という町がある程度広がって、幕末の文化文政ぐらい、一八〇〇年頃にかかる頃の広

さでして、文化文政頃に囲った、江戸の朱引といいますが、江戸の市中はここまでだよという図が、東京都の公文書館に今でも残っています。それは非常にきれいな図でございますので、なんかの本やなんかで御覧になったことがありません。それになるかもしれませんが、それは大変狭い旧十五区

の区域ですから、例えば上野とか浅草なんかいうのはですね、江戸の中期までは下町じゃないんですね。江戸の町じゃないんですね。

昔、もう亡くなられましたけれど、喜多川周之先生という先生がいらして、喜多川さんと喋っている時にですね。私が台東区の文化財の審議会に今でもいますけれども、喜多川先生が辞められて私が入ったんですけれども、そんなことであつて、雑談をしていた時に、「台東区なんて、君、下町じゃないよ。」って。下町というのは、京橋日本橋を言

うんだって。それは正論だけれども、「先生、今、川を越した墨田区の人やなんかだつ

て、皆下町って自分達言っているんだから、それは今通じませんよ。」なんてことを喜多川先生に言ったことがありませんけれども。

事實は喜多川先生の言う通りで、台東区や浅草、上野が下町といえますか、江戸の朱引の中に入ってくるのは文化文政ぐらい。大体19世紀に入る頃なんですね。それまでは朱引に入っていない。その朱引図も今の橋場の先の明治通りあたりで、白鬚橋のところですね。あそこで切れておりまして、荒川区は最後まで朱引の中に入らないと。それから、例えば皆様よく御存知の『本郷もかねやすまでは江戸の内』という川柳がありますけれども、あれは今でもかねやすさんあるんですが、残念ながら道の反対側に移っちゃいました。本当は今の反対側の通りを限って、そこまでが江戸の内ですから、今の文京区の区役所は僅かながら外れちゃっているんです。江戸郊外になっちゃうわけですね。ですから、そんな形が大体江戸の内なんです。ただ、も

う一つは寺社奉行が管轄する黒引こくびきという、朱引に対して黒引というのがありまして、これは実は朱引よりもずっと小さいんです。朱引のまた内側但し一ヶ所だけ、目黒のところだけは、寺社奉行が管轄した黒引の中に入っていますので、その部分は朱引よりも外にあるということになります。

江戸の人口・東京の人口

よく江戸は日本一の、世界一の人口を持っていたということが言われますけれども、江戸の人口というのは、最初は何千人もいなかったような土地ですから、そんなに世界一なんてことはあり得ないわけですが、江戸時代もわりときちっと記録を残していていますので、実は一六〇九年という年、一六〇〇年が関ヶ原ですから、その直後になります。この時に江戸の人口というのを調べた人がいるんですね。で、家康が江戸に来たのは、一五九〇年、天正十八年という年ですので、それからすると十九年後ということに

なります。約二十年後、この時の江戸の人口は十五万人だったということがわかってきます。今から考えれば全く取るに足らない数ですけども、しかし、二十年で一寒村とさえ言われていた江戸の人口が十五万人まで増えた。ということ、江戸が着実に発展してきているということは、

存じません。それで実は、高階秀爾先生という東大からこの西洋美術館の館長で来られて、今大原美術館の館長をしていらつしやる、去年文化勲章を貰われました。お祝いの会を私なんか企画して、したんですけれども、その高階先生と雑談をしている時に、「突然で申し訳ないけれども、江戸が百万の人口になった時、一七二〇年に、パリやロンドンは何人ぐらいですか」と言ったら、浦井さんそんな無茶なこと聞かないでと、高階先生に言われました。

一の人口を持っていたことには異議ありませんか」ということを聞きましたら、「それは異議ないと思うけど、モスクワの人口ってわかっていないだ」と高階先生は仰言っていました。

で、江戸の人口が実は世界一になったのはいつかといいますと、一七二〇年享保5年という八代將軍の吉宗の初めの頃です。一七二〇年に江戸の人口は百万を超したというふうに言われております。この百万という人口はまあ大体ですけれども、半分が町人、半分が武家と神主さんとお坊さんと、大体そういう仕分けで、これはずっと江戸の比率としては、あまり変わっていないというふうに言われています。この百万になった享保五年、一七二〇年の江戸というのは、世界一の人口だと言われているんですね。

ただ、私は専攻が日本歴史ですので、海外のことはよく

ただ、まあモスクワの人口がパリやロンドンを超えていたとは私には思えませんので、パリやロンドンの人口がずっと後に、百万になったという事になればですね、江戸が世界一の人口を持っているんだということを言ってもいいんじゃないだろうか。というふうな話を高階先生としていたんですが、実は江戸の人口はよく百万と言われますけれども、一八四〇年頃、天保

それがそうですね。こっちが勝手に年次を指定して聞いたんですから、それでは質問変えますけれども、と言って、「先生、パリやロンドンが百万になったのはいつ頃ですか。」というふうにお聞きしましたらば、「それは大体百万という人口が出来たのは一八〇〇年代の後半であるというようなこと、それがパリの人口だ。ロンドンの場合には、一八〇〇年代の前半だろう」と、いずれにしてもじゃあ、

二七二〇年には江戸が世界

体どれぐらい人口があったんだらうというと、京都が約三十万人、それから大阪が五十万人、これはわりと変わっていないんですね。江戸

の初期末ぐらいから中期、後期と、大阪も京都も減りもしないし、そんなに増えていないということ、江戸が新興都市としてどんどん発展していったということがよくわかります。関西の二大都市はずっと安定した人口を持っていたというふうに言ったらいいんだらうかと思えます。

その江戸の人口がですね、明治になりますと、実はがくっと減ってしまうんです。明治2年から三年にかけての人口というのは、大体四十二万人。明治5年になって、五十万人ということですから、江戸の人口の半分にも満たないということになります。

そのわけは、江戸というのは一つは参勤交代で武家が出てくるわけですから、例えば加賀藩なんていうのは、殿様が江戸にいる間は、約四千人の家臣が江戸に常駐しているわけです。参勤交代制度が明治になってなくなっちゃえば、江戸にいても仕方がないんですね。従って、一時的には、各大名が皆、国元へ帰っ

てしまう。家臣もついて帰ってしまう。

そうすると、江戸の御店おたなというのは、三越さんとか、松坂屋さんとか、いろんな御店がありますけれども、松坂屋というのは伊勢の松坂、乃至は後に名古屋の伊藤という商売している方と一緒に

て、伊藤松坂屋になるわけですが、名古屋や伊勢から皆奉公人を連れてくるんですよ。越後屋さんは越後から連れてくるんです。三越さん。というようなことですから、いっぺん大名が国元に引き上げちゃいますと、大名に対して商売していた率が高いので、江戸の町人だけを相手にしていたら、商売が成り立つまいというところで、御店は皆、一時江戸から引き揚げてしまいます。

そうすると、そこに勤めていた人は皆、国元から連れて来た人なんです。ですからその人たちも帰ってしまう。そこに残っているのは、町人を中心とした人間で、それが約四十二万人と、激減をしたという。それが徐々に回復し

てくるわけですが、実は江戸の百三十万人という人数に、東京府の人口が、或いは東京市の人口が戻ったのは、明治21年の頃なんです。

これは非常に大事なことでして、明治21年というのは、21年から22年にかけて、日本は憲法をつくります。そして国会を開設します。それによつて明治政府が完全に安定期に入った時代というふうに考えていいと思えます。その時に江戸の人口に人口が回復しているということ、大名もまた再び江戸に帰ってきますし、御店も帰ってくるということがあつて、やつぱり東京が圧倒的に中心地になってくる。

明治政府も当然、京都から江戸(東京)に本拠地を移しますから、そういうのが明治21、22年頃になって江戸の人口に回復するという形になってくるんだらうと思えます。従つて、この明治の初年から、明治20年ぐらまでの間を東京時代と呼んでいるんですね。とうけいのけいというのは、京都の京の字の間に一

本棒を入れて書く。それでトウケイと読ませているんですよ。トウキョウではありません。トウケイと読ませている。そういう時代が、古い明治かなんかの文献ご覧になれば一本棒の入っている、仮名が有ろうと無かろうとですね。一本棒の入っている京の字があるとありますが、それはトウケイと読ませている時代だと考えて頂いていいと思えます。

この時代はですね、江戸東京博物館の前の館長だった小木新造先生が、もう亡くなられましたが、トウケイ時代という本をNHKブックスに書いていらして、その小木さんがいわば江戸から東京へのつなぎの時代で江戸から東京じゃなくて、江戸、トウケイ、東京というふうに考えたほうがいいというのです。小木さんがそういうことを言われたときに、私が小木先生に「いやそれ人口的にもびつたり合いますよ」なんていうことを言ったら、「ああそうなんだ」なんて言っておられましたけれど、今申し上げましたよう

に、人口ともびつたり合うんですね。

で、実はその人口が江戸を越して東京の方が本当に人口が多くなっていう時代は明治30年代なんです。二百万人になります。それからほとんど増えていくわけですが、この明治30年というのも記憶すべき時代で、このころから江戸に戻ろう、江戸を見直そうという、江戸回帰ということが起こってきます。江戸に関するいろんな本がこの頃出始めますけれども、それは皆明治30年代にかかる頃から後なんです。

そういう点では、明治20年代になって、明治政府が安定して、更に十年経つて江戸を見直そうじゃないかという話が出てくる。それで一つの時代の流れというのがわかるのかなと思えます。

上方文化から江戸文化へ

そういう江戸が、東京が、経済や文化ではどうだったのかと申しますと、これは元禄一七〇〇年頃ですね。元禄元年というのは一六八八年です

から、一七〇〇年頃と違って頂ければいいです。この元禄ぐらいまでは明らかに上方の文化、上方の経済なんです。京、大坂に江戸は全く敵わないと。一番わかりやすく申し上げれば、当時の文化人を考えて頂くと、井原西鶴、近松門左衛門、松尾芭蕉、皆関西の人です、これね。芭蕉みたくに東北までずっと歩いた人はいますけれども、しかし、本拠地は関西ですから、文化的にも経済的にも少なくとも一七〇〇年代、18世紀に入る頃までは江戸が関西には及ばなかった時代ということがいえ

ます。そして一七五〇年頃、宝暦というのは一七五〇年、吉宗の終わりの時期ですが、その頃から関西から、上方から江戸へ、文化も経済も中心地が変わってくるという時代だとお考えになって頂いていいと思います。

これは例えばですね、一例を挙げると地本問屋、今の出版業ですね。出版業の数が、宝暦には、上方より江戸の方が上回るんですよ。出版

というのは、一種の文化のバロメーターとして使われますので、例えば出版を見ると、一八〇〇年頃にはもう全く完全に江戸の方が上方を上回るようになる。

しかも今日本を代表する文化だといわれているような、浮世絵というの、勿論関西にもありますけれども、主力は全て東に、江戸に移って来るとい形になります。ですから、江戸時代の有名な浮世絵師をお考えになってみると、関西人でいないんですね。勿論(長谷川)貞信とか何人かの有名な作家はいますけれども、広重にしても北斎にしても有名な人は殆ど関東の人だということになります。

もう一つ特徴的なのは、上方の文化と違って、江戸の文化は庶民と武家階級、支配階級とが一緒に文化を作っているという点ですね。例えば浮世絵みたいなものは、庶民が生み出した文化と俗に言われていますけれど、細田栄之とかそれから歌川広重なんていう人は、皆幕臣なんです。大田蜀山人なんて狂歌の人も

有名ですが、四方赤良ですが、あの人も幕臣です。

ですから武家が庶民と一緒に文化をつくっている。そういう時代と言えます。ですからこの時代の文化人を考えると蜀山人にしても、広重にしても、北斎にしても、それから三島自寛にしても、谷文晁にしてもですね。挙げていけば、殆ど全員が関東の出身です。江戸の出身です。相国寺竺常なんて有名な人がいて、相国寺さんだから関西人じゃないかという人もいますけれど、彼は関西人ではあるけれども、出てきて江戸と一緒に文化に係っているんですよ。江戸で活躍している文化人です。

関東の人が元禄に西に行つて何かやっていたということはある見かけない。ところが後期になると、文化文政になると文化文政ですね。明らかに江戸の人がそれを構成している。しかも庶民と武家と一緒に構成しているというところがわかります。で、この頃になると大名もそういう文化に関わってくる。例えば絵巻

なんて作ったのは細川重賢とかああいう有名な人ですが、それから増山雪斎とか、大名も一緒に文化を構成するということになってきました。大変幅も広い高低差も広いということ、文化とはまた内容的に変わってきているのではないかと、いうようなことが言えるんだろ

うと思います。いわば西高東低から東高西低に文化は変わってきたんだというふうに考えて頂ければいいの、と思う

巨大な田舎の集合体

そういう江戸の町というのはどんな構造になっていたのかと話す、さつき申し上げたように、これは西山松之助先生の言葉ですが、『江戸というの巨大な田舎の集合体だ。』ということ西山先生は晩年仰言いました。研究会の時に西山先生がそう仰言った時に、どういう意味だろうかと、僕は一瞬わからなかったんですが、江戸というのは要するに江戸の中に巨大

な地方がいっぱいあるんだという、それはさつき申し上げた参勤交代で例えば加賀藩が四千人出てくる。鳥取藩が二千人出てくるというふうなことになるわけですが、その人たちが全部江戸弁、標準語を喋ったわけではないんだと。その人たちは皆、地方の言葉を喋ったんだと。それじゃあ言葉通じないじゃないかと、お思いになるかもしれませんが、それは秋田の人と鹿児島の人ですね、佐竹と島津の人が一緒になつてぶつかって何か喋っていたら通じないと思います。

でも、江戸には江戸家老を中心に各藩には江戸在住の家臣がいるんですよ。この人たちは実は幕府に対して自分の藩というものをどういうふう

ていくとか。そういうことをしていたわけです。

ですからガイド役がいるから、地方の言葉しか喋れない人でも通じるという形に、要するに通訳付きなわけですね。そんな形があつて、逆に言うとなんか人がいるから、江戸言葉をいつまでも地方の武士は喋らなくなるんだと。

買い物もそういう人がついていて、どこかで見つけたものを買いたければその人に仲介してもらえばいいのです。じゃあ、出入業者が来た時は困るじゃないかって、いちいち全部仲介がいるのかっていったら、これはうまく出来ていまして、江戸の商人とていつかは、何藩と何藩と何藩の出入りの人はこの人、何藩と何藩と何藩の出入りの人はこの人と決めてあるんですよ、お店が。

従つて、島津に売り込みに行く人はちゃんと鹿児島島の言葉を喋れるんですね。秋田に行く人は秋田の言葉が喋れる。従つて、江戸へ出て来ている参勤交代の人が何か欲しいと思えば、相手の国の言葉

でちゃんと喋れば通じるように、出入りの商人はしていたわけです。そういう点では非常に便利に出来ていた。だから逆に田舎が残つちやつたというところもあるんだと思います。

それからもう一つさつきお話をした御店ですけれども、オタナといひますけれども、御店は例えば国元の伊勢屋さんが江戸店を出す。そのうち江戸の方が中心になつてくるんですが、そこでも自分の国に行つて、店員を連れてくるわけですから、まあ今だったら問題になるでしょうけれども、五年なら5年、子どもを連れてきて仕込んで見込みがなければ返すんですね。国元に。

いっぺん全員を給料を与えて国元に五年経つたら帰します。五年経つて帰した後、あいつは使えるなという人間だけを指名してもう一度呼びに行くんです。だから5年という年次が体のいい首切りになつちゃうわけですし、出来のいい奴は何べんでも呼び返されて、やがて番頭とか何と

か、或るいは暖簾分けなんかしてもらえぬわけですが、あまり使いものにならないというところ、これは一回返されたらもう呼んでくれないといううな今だったら問題になつちやうと思ひますけれども、そういう首切りといひますか、そういうことも現実には起こつていたんだというふう

江戸の経済

に考えていいと思ひます。そういう場所ですから、江戸のさつき申し上げた経済性なんかの問題でもですね。江戸というのには少なくとも元禄、もうちよつと言つて宝暦ぐらゐまでは江戸でろくなくものが出来ないということになります。江戸で出来るお酒は例えば清酒は出来なくて、どぶろくだとかいうことでして、元禄は少なくとも過ぎない。もうちよつと言へば、宝暦一七五〇年頃にならないと、江戸で主要なものが出来なくなつていたわけです。ですから、例えば味噌、醤油でも、初めは江戸へもつてきて群馬県の館林でつくるん

です。これがうまくいかなくて、今の皆さん御存知の野田の醤油、野田とか銚子とかあつちに行つて、ここで成功する。清酒も当分出来ません。そういう時に、江戸の人はどうしたかというところ、船で運んだんです。これ陸路で来ると大体江戸と京都大坂というのは、最低12日。急いで12日、普通に行動すると、十五日、半月かかったんですね。これはお酒なんて今みたいに防腐剤ないですから、菰をかけて夏場なんか運んできた腐つちやいますから、それから生鮮食品は一切運べない。それが船で来ると大体三日から4日

で江戸に完全に着くと。3日から4日というのには、実は江戸湾というのとはわりと船が入りにくい。風向きによつては入れない。一つは銚子あたりが発展したのは、江戸湾に入れない船があつちへ行つたからですね。そして川を伝つて、川をぐつと迂回して隅田川に降りて来るといふ格好で、江戸という町に入つてきたというところがあつち、浦賀に奉行

所が置かれて、浦賀というのは一つの起点だったのは、そういう船の水利の問題です。そんなことがありまして、上方から来るものはいいもの。上方から下つてくるものはいいもの、下つてこないものは悪いものと。下つてこないものというものは江戸の近辺で自給できるものということ

です。今、皆様くだらないものつて仰言いますでしょ。あれは上方から下つて来るものは、上手の物、下つてこないものは下手物だということ。そういう言葉から生まれたんですね。くだらぬものつて。でも、くだらぬ物が全部悪いかつていうと、そうでもないんです。生鮮の野菜なんというの、上方からいくらか船で持つて来たつて、四日も掛かつたら葉っぱなんてしおれちゃう。しおれちゃうから。そういう物は全て江戸の近郊でつくらなければならぬ。それが例えば皆様御存知の練馬大根とか、谷中生姜とか、小松菜というの、あれは小松川菜ですね。江戸時

代。そういう小松菜、それから練馬大根、谷中生姜なんていうのは、皆土地で供給できるものです。

そういうものはくだらぬ物のうちに入れられていますけれども、じゃあ生鮮食品なんてくだらないからなくていかとといったら、そういうわけにはいかないのです、大きく言えば、西陣織にしても、お酒にしても、工芸品にしても

やっぱり江戸の前半は京都や大坂が勝っているわけですから、くだりものはいいものと。丁度明治以降の舶来品という言葉と同じような意味で、使っているわけですね。だから下りものは良いものだよ、下らない、下ってこないものは大したものじゃないよ。そういう言葉だったというふうに、お考え頂いていいんだらうと思います。

江戸の町は男性社会

もう一つはですね、江戸というのは、皆様御存知の吉原というのがある、特に女性の方には吉原の評判が悪いのですけれども、あれは一種の

必要悪なんです。江戸の人口というのは、圧倒的に男性社会なんです。御店にいても男性、参勤交代で来る武家は奥さんや子どもを連れて来ませんから、江戸在住の武士以外は、皆単身赴任ですから。御店も男の子を連れてくるわけですから、女性は通常はいません。従ってどこにいても男なんです。

従って男性が圧倒的に多くて、これが男女ほぼイーブンになるのは、本当の幕末です。それまで少しずつイーブンになってきますが、初めは圧倒的に男が多くて、女が少ないと。そういう社会ですから、夕方暗くなってくると、そういう状態が続いていけば、若い女の子なんかは外に出にくくなっちゃいますね。危ないですから、そういうことを解消するために、一つは吉原という場所が。今の浅草の方は、新吉原ですけれども、吉原という場所があるんだというふうにお考えになって頂ければいいので、ああいう施設が良い悪いは別にして、必要だったんだということ。す。

それからもう一つ吉原という、目くじらを立てる方がいますけれども、吉原はもう一つ大事な仕事の場所でもあるんですね。それともう一つはいわゆる今でいう流行の発信地。言葉も着物も吉原が当時の流行の発信地なんですよ。吉原でどんな着物とか、どんな髪型が流行ったとか、そういうことが江戸の人に

とっては大事なことになっていった。そんなのはどうでもいいやと仰るかもしれませんが、吉原というのは、ピンからキリまでありますから、上の方の女性というのは小さい頃から、七つ八つから徹底的に仕込まれますから、言葉遣いもそうだし、教養もあるし、大変女性としては優れた女性なんです。それが大夫と言われる人たちで。

従って高尾という女性を伊達の殿様が身受けして連れて帰ったという、勿論正妻には出来ませんけれども、側室として連れて帰ったというような話があるぐらい。逆に言えば、大名と対等に渡り合えるような知識や教養を備えてい

たということが言えるんだらうと思います。

ですから、いわゆる三茶とかお茶ひきとか、そういう人たちと大夫というような人たちとは、全く異質の存在であつたんだということだろうと思います。

それからもう一つ、武家にとっても吉原というのは外せないですね。一つはさつき江戸お留守居役というのを申し上げました。江戸家老です。藩の。その人たちが大事なことを相談する時に、各大名の屋敷に集まったら、これは幕府に目をつけられちゃいます。何だか各藩の留守居役が、何々藩の江戸屋敷に集まってちよこちよこ話しているというのが幕府に洩れるとこれは睨まれてしまいますので、彼等は相談事がある時に個々に吉原のいわゆるお店に行つて、そこで相談事をしたんです。これだったら目立たない。

品の品物や、どういう扱いをしたらいいのか。お祝いしなきゃいけないだろう。その時に五万石の大名の家老たちが連絡をとって、何月何日の何時に何の刻に、吉原のどこどこに集まってくれ。ということになって、そこで相談をするんですよ。

で、その相談もですね、全く何もないところで相談するのはなくて、大名というのは、皆お頼みというのを持っています。江戸幕府の中の旗本の三千石以上位の間を中心に、大身の旗本ですね。お頼みというのを持っていて、まさか老中や若年寄には頼みませんから、そのお頼みを通じて、今度幕府じゃ五万石の大名だったら、どのぐらいのお祝いを貰うつもりをしているのかというように、何を、何人かのお頼みから聞くわけですよ。

その資料を持って、集まった吉原で皆でうちのお頼みはこういうことを言っていた。うちのお頼みはこうだった。前回は各藩自分のところをやっていますから、こんな

物をあげていた。というのを相談して、じゃあ大体このぐらいのへんにしておこうというところで合意するわけです。

これをやらないで、いきなり各大名が献上金を持っていった場合は、あそこはばかに気入れて持ってきたとか、あそこは随分けちったと言われてしまいますから、そういうことがないように、大体大名が揃って何かが出来るようにというようなことを、考えていたわけですね。

そういう点ではですね、吉原というのは、あまり馬鹿にしたものでもないというようないな気がいたします。

江戸から東京へ

時間が迫ってきましたので、ちよつと明治以降の話に繋げさせて頂くとですね。今我々が使っている共通語ですが、『であります』とか『何とかでございます』とか『何か』が、『ます』とかという言葉に変わってくるわけです。中間が省略されてくる。というふ

うに考えて頂いたらいいんだろうと思います。

それから先ほど申し上げた人口のうちですね。江戸の武家地というのは、大体69%だと言われています。江戸の全部の土地の広さのうちの69%は武家屋敷だった。

そして残りの31%をですね、神社仏閣と、一般の庶民とに分けていたわけですから。しかもその神社仏閣と庶民の住んでいた土地というのは、約15、16%ぐらいしかないわけですね。例えば16%が町人地だとすると、江戸の人口が百万の時には、五十万人が江戸の16%の土地に住んでいたんですから、今の東京は過密都市だと言われていますが、江戸時代から町人地に関しては確実に過密都市なんですよ。

そういう点ではですね。江戸というのに住みやすくていい土地だと、僕にそういうことを言ったのは、亡くなった杉浦日向子さんですけれど、杉浦日向子さんはすごく江戸を褒めるんですね。彼女褒めるのはいいんだけど、ベニヤ板一枚みたいなの、トン

トンとやれば隣りの家がわかつちやうような、落語にありますよね。釘を打ったら隣りの仏壇の仏さんの頭を抜いちゃったって。仏壇なんて飾っていませんから、そんなことは落語で、あり得ないんですけれども、普段では。

でも、そういうような釘を打ったら隣りに釘が出ちゃう。で、しかも、間口が九尺で奥行が二間、十二尺というのが、江戸のいわゆる普通の長屋の広さですから、踏込の三尺は、土間になってそこに水桶を置いたり、勿論水道というのには、そのへんはすぐいんですよ、下水道はちゃんと完備しているんですから、ヨーロッパよりずっと進んでいるわけです。

でも、各家に入ると、障子一つをぱんと開けるとそこが土間で、水桶が置いてあつて何とか調理出来るようになってる。それを上がると、あと一間半のところは四大家族でも、五大家族でもそこで食事し、そこで寝なければいけないわけですから、大きな声をたてれば隣りに聞えちゃうと。

で、僕は杉浦さんに言ったの、どうしてそれが杉浦さん、今の若い人が満足出来るわけないでしょう。プライベートなんてこつから先もないよという話をしたならば、それでもあなた火事になった時、考えてよと、杉浦さんの話でした。何しろ自分のところのお釜と布団と着たきりの衣装もつて逃げれば、後は燃えたと何したって建てるのは自分じゃないのよ。というのが杉浦日向子さんなんです。

それは杉浦さんはそれでいいかもしれないけれど、今の若い人に江戸の長屋に住みたいと言わせるのは無理だと僕は言ったの、覚えていただけますけれども。

そういう具合にですね、庶民はなかなか大変な生活をしていたと思いますけど、でも下水道は完備していますし、お手洗いやなんかは共同ですけれども、そういう点ではですね。なかなか治安も良かったんですよ。各町のところに木戸があつて、そこに木戸番というのがありますから、夜時間過ぎて帰ってくると、その

木戸番に咎められます。その木戸番がどこに行くんだと言つて、次の木戸があるその先の何々という町へ行くという、その名前やなんか聞いてきて木戸番が「よし」と言えば、送り拍子木ついで、ちよんちよんと決まっていますので打つて、次の木戸番がそれを聞いて人が通ってくるなって。そしてまた次の木戸番が身元チェックして通してやるというような形で自宅に帰れる。というような形になっていましたので、治安も結構良かったんだろうと思います。

そんな点ですね、江戸という町は、庶民にはわりと良い町であつたと思いますけれども、今日は食べ物と生活の話も申し上げませんが、話も、なかなか大変だったことも大変だっただろうというふうに思います。

お約束の時間ですので、ちよつと中途半端ですけれども、こんなことでお許し頂きたいと思えます。どうもありがとうございます。